羅摩琵琶歌
川中島

自序

凡そ詩歌琴琵琶歌を奏せんとするには まづその歌曲の性質 精神のある所を究め 然して その歌詞に従ひて 悲哀なる個所は悲哀 壮快なる個所は壮快に曲節に抑揚を附し 聴者をして恰もその境にあるが如く感ぜしめざるべからず これ琵琶奏曲 第一の要義なり 故に吟ぜんとせば まづ精神の沈静を計り 熱心に竜ゝ浮華なる所なくして 楽譜を附し 所謂節に生かして奏すべし 節を歌ふ人はあれど 精神を歌ふ人は少し 故に吟ぜんとせば 上の精神を以て曲節に対し 精神を没却して 大方諸子 幸に一本を座右に備へて この注意を忘れざるべし

謡節注意

音の大小高低等は それぞれ大小長短の符号を以て示せり 大干とあるは最高音を称するなり 故に謡者の大干を定むれば其の人の音声を以て歌ふを可とす 如何となれば 謡者が自身の最も高音を発せざれば 身に適せざる音声に困難を来すのみならず 第一に聲に餘裕なく 聴者に於ても 聞苦しきものなり 中干とは 初め地音に出て中位六七の干音に上げ 本地に落すものなり 地音とは 三若くば四五位の音にして 歌の曲譜により異る者なり 萌しとあるは勇壮活発の音を以てすべし 吟替りは概して悲哀なる場合なれば その心地を以て沈聲等を用ふるを可とす 段落即ち謡切りは 符号の示す通りに聲を引き廻し 段落を地に落す

明治四十一年文月下浣

編者識

川中島

天文二十三年、秋のすゑなれども、上杉謙信は、八千余騎を従へ、

段

信濃中島において、四つ「大干」我此方の戦は武田信玄を迎へ

めて、親しく雌雄を決せんと、渇羨きこと久しく犀川を渡して陣

をぞ取ふける。信玄は明るの夜明けなくして、二萬餘騎にてお迎ひ

結を固めて戦はず、謙信は氣を焦燥、村上義清ふ言ひ含め、

明治
41 8 1
交内

月影暗き山の草葉の露を分けさせて彼方此方に兵を
伏せ、樵夫に擬せし兵を出して甲斐の兵営に近づけし
むれば、甲斐の兵、山崩と計略とは知らで、朝霧の
間に追ひまくる、待設けたる伏勢は時こそ来れと勝鬨を
ドット揚けて引包み、籠に物を取るが如く一騎も残らず討取
たり、信玄怒て軍勢を整へ、雲霞の如く繰出せば、謙信の備

を立て声を上げて、鼓躁して起し、虎嘯て風を呼ぶ勢ひ破竹
の如くにて入り乱れ入り乱れ、攻め戦ふ有様は、颶風砂
を巻き、百雷岩を投ぐるに異ならず、甲斐の勢退けば、
越後の軍之れを追ひ、越後の軍退けば、甲斐の勢
之を追ふ、大手の兵を合すること十七度、何れを勝とし
弓引く方も見えし、信玄が一と手の勢の旗を伏せ、

川戦ひて厳華の、陣を私かに忍ばせて、勇み立
たる謙信が、「崩」旗を近く進み寄り面もふらず
斬て入る、麾下の軍勢は、思はぬ勢に敗られ走る
跡より甲斐の兵勢を作りて追ふる、宇佐見定
行是をみて、猛虎の如く憤り憤馬を駆て大音我
手の勢に下知をなし、敵の横合より、無二無三た
実入て闘ひ、いはせず追落す、信玄度を失ひ、慌てふ
敗を当て、置る何所まで逃るべと、曰ひも果さぬ内
くる、信玄力を持て抵抗く、軍配扇にて受たれど、
「大」
「扇に二つに折られたり
降とみて笠取るひまもなかりけり河中島の名月の面

と歌ひ、如く二の太刀は、早肩先に切り込み、あつと云ふ間に信玄が、命は岩に砕かんと、泡と消ゆる危きを、移さんとして軍兵が、必ず矢ぶすまを速れ共、水早くして近寄れず、謙将原大隅、鎗を引ぶして謙信を、突きこけたるとあだつきて、斬くてはなるぐと鎗を擎げ、唯一とおちにとあたるに、馬に当りて馬逸す、謙信駒城鎮めんと、手綱かい繰る其隙に、信玄は、虎口を逃れ去りにけり

鞭聲肅々夜渡河　曉見千兵擁大牙

遺恨十年磨一劍　流星光底逸長蛇

斯く信玄を、手負しなる、謙信が、心の中、やゆ何ならん、

「段落」思ひやるだに哀れなり信玄は、肩の痛手に耐へ

兼ねて、其夜の中に軍勢を、まとめて出る月影に、道を求めてあるくく、我古郷に帰りけり我、（段）落古郷に帰りけり

八

明治四十一年七月廿二日印刷
明治四十一年八月一日發行

出版目録

國の御柱 附送別　城山 附蓬来山
錦の御旗　廣瀬中佐
威海衛　小督
臺灣入　川中嶋
吹雪の敵　吉野落段
丸　石童丸

不許複製

257
530

正價壹部金七錢

曲譜 東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地 西田金起
發行者 東京市日本橋區馬喰町四丁目廿壹番地 西村寅次郎
發行者 東京市神田區駿河臺袋町十一番地 鈴木武二郎
印刷者 東京市神田區駿河臺袋町十一番地 須佐權平
印刷所 東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地 東陽堂
發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地 東雲堂
發行所 東京市日本橋區馬喰町四丁目廿壹番地 文友堂